

Title	都市生態と文化編集：アクターとしての「メタセコイア」と「てりむくり」
Author	岡野, 浩
Citation	都市と社会. 4 巻, p.146-175.
Issue Date	2020-03
ISSN	2432-7239
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学都市研究プラザ
Description	
DOI	10.24544/ocu.20200420-001

Placed on: Osaka City University

〔特別寄稿〕

都市生態と文化編集

アクターとしての「メタセコイア」と「てりむくり」

岡野 浩 (大阪市立大学 都市研究プラザ 教授)

〔キーワード〕 アクター・ネットワーク理論 (ANT) / 文化編集 / シンクレティズム /
メタセコイア / てりむくり (屋根)

本稿は、これまでのレポートシリーズ (空堀・八尾・信楽・阿倍野・上海・マルタ・ウブサラ等) で扱った事例に基づきながら、市民知による創造的な空間づくりの類型によって文化的な地域間の交流の在り様を検討するものである。とりわけ、阿倍野を中心とした市民レベルの経済・文化活動や学校、公園などで見られる「メタセコイア」(ヒノキ科)の植物、さらには「てりむくり (屋根)」を通じて、都市における様々な「アクター」(行為する者・物)を文化や自然、生態系に置き、それらのネットワークのあり方が、いかにして市民知を創造する「場」となりえるのかを阿倍野の実例を通して検討した。ヒト・モノ、知、場・道、集り・交流、そして記憶のネットワークが創造性の源泉であるが、記憶はイノベーションを殺ぐこともあり、学習棄却(unlearning)が必要となる場合もある。文化編集という見方は、多様性や多義性を含んだ重層性という概念と密接に関連している。歴史における様々な断面の時間と空間を超えた関連性を読み解くことが必要である。

1 序

都市の創造性とは、その都市に住んできたあるいは現在住んでいる人々だけで維持できるものではない。都市を訪れ、関わり、当該都市のことを他の都市に伝えた人々などととも、自然の役割が重要である。これまで、都市で生息する生物とそれを取り巻く環境を対象としつつ、柿や竹の産業的な適用をはじめ、メタセコイアなどの樹木を中心として都市生態 (urban ecology) と文化創造性の相互関係について考察してきた (岡野ほか 2015、岡野・西辻・太田 2017 など)。また、ヒトやモノ、コトや記憶をどのように編集するに注目し、動詞を用いてそれらの創造的組み合わせを見出すことの重要性を主張するとともに、「包摂する (包容力)」「バランスをはかる」「俊敏性」(パッチングする) という三つの動詞と創造性との関係性から検討した (岡野 2012a, 2014a,b, Okano 2016b)。

本稿は、これまで編集・執筆してきた9冊のレ

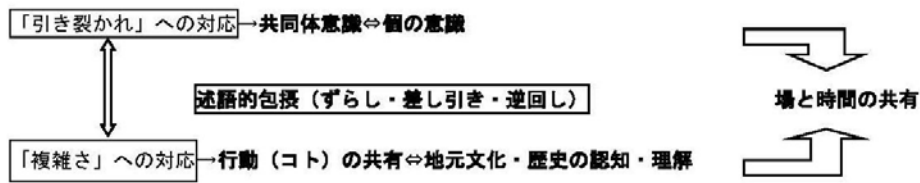
ポートシリーズ (空堀・八尾・信楽・阿倍野など) で扱った事例に基づきながら、市民知¹⁾による創造的な空間づくりの類型を示し、文化的な地域間の交流の在り様を検討するものである。とりわけ、阿倍野²⁾の市民レベルの経済・文化活動や阿倍野の学校や公園などで見られ、石炭の原木である「メタセコイア」の植物、さらには「てりむくり」(唐破風)を通じて、都市における様々な「アクター」(行為する者・物)を文化や自然、生態系に置き、それらのネットワークのあり方が、いかにして市民知を創造する「場」として重要な役割を果たすことに繋がるのかを考察したい (岡野 2017, 2018)³⁾。

2 社会的持続性と述語的包摂

(1) 「引き裂かれ」への対応

伊丹(1991)は、一人の人間が持っている三つの側面として、「消費者としてのヒト」「所得者としてのヒト」「共同体生活者・文化者としてのヒト」

図1. 述語的包摂による引き裂かれ・複雑性へ対応



とに分けたうえで、グローバリゼーションによって、国と国との間、ひとつの国の中、ひとりの人間の中、のそれぞれにおいて「引き裂かれ」が生じることを指摘する。その上で、重要な点は国際的にひろがる事業活動の「複雑さ」と、それがもたらす「引き裂かれ」にどう対処するかにあるとし、「グローバル統合」の必要性和その困難性を強調した。これに対して、岡野(2012a)では、グローバル化による個人の「引き裂かれ」やグローバルガバナンスと公共空間についての議論からコスモポリタニズム(地球市民主義)の重要性について触れ、文化創造とビジネスとの関係性、グローバル都市のガバナンス(「共治」)のあり方、創造的でダイナミックな都市経営システムについて検討した(岡野 2009c, Okano & Samson, 2010, 岡野 2012a,b)。

共同体意識とともに、コスモポリタンとしての「個の意識」を掘り下げることは重要である。個人の「引き裂かれ」は、「グローバル」という折衷的なあり方ではなく、コスモポリタニズムに基づきつつ、公共空間の4つの象限のポジショニングを広げることが重要であること、また、これまでのトップダウン的なガバナンスから脱却し、多様なステークホルダーによる社会レベルのガバナンスが必要となる。伊丹(1991)では「共同体生活者・文化者」と一括りにされてきたが、近年、「共同体生活者」と「文化者」との間の「引き裂かれ」が顕著になってきた。自己の文化を長期的に理解し、共同体のなかで生活しているという実感を持ってなくなっているのである。

地元の文化・歴史を感じ取り、理解し、人々と共有することを推進する試みが必要である。

(2) 文化編集と述語的包摂

社会における様々な行動様式や文化遺産、人々の営みなどが時代の流れの中で変容を加えられ、元々別のものであったものが重なったり、複数あったものが他のものに埋没したり、まったく新たなものが突如として生まれたりすることを「文化編集」と呼んだ(岡野 2012a,b)。

日本文化の基本作法として「かさね」をあげ、神仏習合が神道と仏教とが同じ空間で棲み分けてきたこと、すなわち、一方が他方を排斥したり圧殺したりすることなく、重なりながら領分を守り、親しく交わるのが有利とみれば「溶け合いなじみ合って」きた(藤原 2008)。そのうえで、「くずし」や「やつし」、「もじり」や「うがち」、「あそび」や「見立て」などの発想や作法を取り上げ、あくまで神仏習合の「習合」は混淆ではなく、交接し混血の神を生むことはなかった。

ヒトが重要なアクター(行為者)であることはいうまでもない。ただ、「誰がやったか」という問題を特定するのではなく、述語に焦点を当てることによって、ある特定の集団や人々が排除されるのを避け、ものに籠められた想いや言葉、そして言葉にならない想いに焦点を当てることによって、そこから抜け出てくるものが浮かび上がるのである。ここでは、モノが重要な行為者であり、記憶やコトを動詞で捉えること(述語的包摂)によって、主体の議論を弱め、ともに形成

してきたもの(共創のプロセス)を出土させることを目指したいのである⁴⁾。ヒト・モノ・コトとの関係性のみならず、それらの一体化を想定しながら、世代間をつなぐモノのエージェンシー化と捉えるのである⁵⁾。

3 文化編集による都市創造性プラットフォーム

(1) 文化の重層性とアーキタイプ(原型・かくれた形)

都市の創造性⁶⁾を増進させるためのものが「文化編集」である。加藤ほか(2004)において、日本文化のあらゆる領域に成立した歴史発展の型として、新しいものが受容される場合、新旧の交替となっていくよりは、古いものに新しいものが加えられるという発展の型が原則をなしているとする。そして、日本人の世界観の歴史的な変遷は、多くの外来思想の浸透によってよりも、むしろ、具体的な感情生活の深層に働くところの土着の世界観の執拗な持続と、そのために繰り返された外来の大系の『日本化』によって特徴づけられるとする。

すなわち、土砂が堆積することにより地層が形成されるように、様々な異なる文化が堆積し、積み重なっていく「重層的な文化の地層」が出来上がってくるとしながらも、深層に働く世界観は「執拗低音」のように持続してきたのであるという。これを「かくれた形」として取り上げる丸山(2004)によれば、歴史が歴史形成に参加する人格の決定の積み重ねによって創り出されるものではなく、非人格的な、大きな時間の流れの「いきおい」として、「おのずからなる」ものと考えられる歴史観を問題にするとしている。すなわち、無窮の連続性、血脈の系譜的連続における無窮性が、日本人の歴史意識の「古層」として、永遠者の位置をしめてきたという⁷⁾。「ことあげされないモノ」、「隠されているモノ」などを掘り出す必要があるといえよう⁸⁾。

本稿では、地層を断面から切ったり、はがした

り、パイプを打ち込んだりしながら、地層の状況を見つつ、地層の関連性・関係性を掘り起こす必要があると考えたい。ここには個人・個別レベルでの重層性も含まれるが、組織間や企業間、さらには社会レベルでのそれを含むものと考えたい。内包される多様性や多義性を含んだ概念として重層性を中心に捉えたいのである⁹⁾(岡野 2004)。さらに、様々な断層面¹⁰⁾の時間と空間を超えた関連性を読み解くことが必要であろう。断層面の重なり具合に着目し、それらの断層面がどのような複合的な意味内容を持っているか、さらには、その意味内容がいかなるプロセスで単一の意味内容に収斂させられてしまうか、という問題である(岡野 2006a, 2008)。

さらに、日本的機能別管理、現場・現物主義、ボランティア性の強調、源流管理という日本の経営システムの特質についても、これらの特質を相互に関連させることによって、テクノロジーとしての制度を構成するプロセスの記述が必要となるのであって、このプロセスの変化・変容の記述が新たな「文化史」となる(岡野 2002, 2003)。

フーコー(1969)は、言説的実践の断層を切り離し、実践が生成され変形される法則の定式化を行っただけで、様々な知の体系の間の不連続面を「出土」させ、これまで見えなかったものを見えるように変換する(可視性の創造)手法を「考古学」(archaeology)とよぶ。さらに、ある特定の主張・概念・真理がいかなるものであるかを分析し、連続的な「事実」の連鎖としての系譜において本質や根源的統一性などは存在しない、とするフーコー独自の「系譜学」(genealogy)を提唱した(岡野 1995)。これはある意味において、重層的な空間を設定し、その時系列での非連続な部分に焦点を当て、なぜそれがそこに関係性として存在しているのかを様々な「言説」(実践よりも)を通じて明らかにするところにフーコーの真骨頂があった。『ある「空間がどのようにして

「歴史」の一部をなしていたかを理解することが重要』というのはそのように理解すべきであろう。問題は、言説に焦点を当てることの是非である。本章では、「言説」を詮索しつつも、「実践」（レイブとウェンガーのいう）を遡上に乗せることとしたい。

(2) 文化編集の射程：編集行為と動詞化

様々な重層性を観察しながら各層の断面の重なり具合に注目し、それを解体したり、別の層とそこから離れた別の層とを接合したりするようなことをここでは「文化編集」と呼ぶ。ある「翻訳」が失敗したときにはさらなる「翻訳」のため、既に安定化されたブラックボックスを開き、アクターの立ち現われ方が変幻自在に変容するプロセスを表現する概念として、さらに、丸山の「非人格的な、大きな時間の流れの「いきおい」として、「おのずからなる」ものと考えられる歴史観」に関わるものとして、「翻訳」を捉えたいのである。

岡野(2009a,b)では、製品の機能とコストとの関数として価値をとらえ、製品の改善を行っていくための手法である VE (value engineering) を例にあげ、顧客が望む製品やサービスの「機能」を、静的な「名詞」としてとらえるのではなく、目的語と動詞とに分解して動的に捉え直すことによって、その静的な名詞が動きのある「改善行動」を示す「行動」(action)に変換させることができるとした。それらの行動をクロスファンクショナルな活動に変換させることにより、分業体制の高度化が図られる可能性があるといえよう。戦略から戦略的行動へのシフトがこれである。

これにより、VEの本質は、製品やサービスの機能を目的語と動詞に分けることによって、モノをコトに変換することを通じ、設計者ほかの開発担当者の過去の経験で潜在意識のなかに埋め込まれていたものを引き出し、そこにはいな

写真1. 「てりむくり(屋根)」



筆者撮影

い、不可視の担当者や潜在顧客などとのコミュニケーションを促進させることにあることが分かる。

ここでは、コトがモノに埋め込まれ、動きを触発するものとして「想い」を捉えること、つまり、異質のものを共存させた、日本における重層的な文化的特質を表すものとして捉えたい。

あわせ・かさね：文化編集の典型

日本の「方法」に焦点を当て、あらゆる行為を「編集行為」に接近するものとして松岡(2006)がある。「日本の方法ではなく、日本という方法」という視点から、松岡は、日本文化形成の方法(編集法)に焦点を当て、二項対立でなく二項同体(述語的包摂ともいう)として考えること、および言挙げされていない本質部分を暴き出そうとした。すなわち、日本という方法の特徴は、主語的ではなく述語的に繋げて行ったことであり、文化を抽出する方法として、「おもかげ・うつろい」(記憶し、投影する)あるいは「あわせ・かさね・きそい・そろえ」(並立させ、重ねて、競い合わせて、揃える)という独特の手法が強く反映されていると主張する。さらに、おもかげ(イメージーション)・うつろい(移っていく、変化していく)、空・虚・洞の文化、想い・記憶の集積物として祈り¹⁾など、日本の編集との関わりから特質を示すのである。

また、この点は、主語を省略する日本語の特性にも関連するであろう。「てりむくり(屋根)」は合わせや重ねの象徴である。唐破風といいながらも、日本独自の様式である(立岩 2000)。あわせやかさねは習合ではなく、混淆であることに留意すべきであろう。ズラシのほうがその特質を端的に表している。

茅原(1999)は、新古今和歌集の選者である藤原家隆¹²⁾が和歌の中に使った「心の果」や「しのぶの奥」という心奥表現¹³⁾に着目し、この表現の発生や流布、その特質を調査するとともに、当時の歌壇である「六百番歌合」でこうした表現が用いられた時代背景や、いかなる現象が生じていたかについて考察する。その過程のなかで、当時(建久4年ごろ、いわゆる新古今の時代)、観念的な空間認識を伴った「心の底」という語が流行し、「心の果」や「心の奥」、「しのぶの奥」などの広がりといかなる関係にあったのかを追求した。その背景には西行の入寂したことにあるとし、西行和歌の本質が仏教的な実相観に支えられた自己と自然との希求にあり、その根底に「観想」の態度が見られることを指摘する。さらに、西行の和歌で象徴的に出てくる「心の月」と「心の空」は奥行きを示す「果」・「奥」・「底」・「末」・「道」などの語を伴い、心の内部を覗くという密教的な月輪観を表象したものであるとした。

ずらし

性質の異なる二つ(以上)のものを重合させる「あわせ」や「かさね」とはまったく異なる文化編集の例として「ずらし」という手法がある。すなわち、視点や立ち位置、時代認識や時点を前後にずらすことによって、これまでとは異なるスペース(実体的・バーチャルの双方)を創り出す手法である。

Okano(2008)では、「あわせ・かさね・きそい・そろえ」という動詞に加えて、この「ずらし」に

よって日本的管理会計の歴史的特質を解釈しようと試みた。つまり製品開発段階におけるコストマネジメントの技法である原価企画をとりあげ、生産段階では原単位管理を中心とした実体管理や物量次元(課業レベル)を行い、原価管理の主軸としては生産段階から設計段階に時期を「ずらし」ながら、新モデルと旧モデルとの仕様の原単位の差異のみを金額換算する差額原価法を用いて成果をあげた。

佐々木(2010)は、美学の領域から「ずらし」の想像力について和歌を取り上げながら考察する。「おもかげ」「なごり」「なつかしさ」などは日本人にとって「詩」を感じる言葉であり、その多くは文化的な環境のなかで生まれ、個々の文化に固有の感性が生まれるとする。その上で、日本的感性の特性である「ずらし」と「触覚性」を明らかにした。

さらに、山西(2008)は、多文化社会コーディネーターの形成に関連させ、異なったものを「ずらし」ながら繋げていく能力の重要性を掲げている。行政・企業、学校・市民団体などの組織、教育・福祉、医療などの領域などが従来持っていた枠を変革するキーワードとして「ずらし」を重視する。「ずらし」とは読み替えであるとともに、関連させたものとして想いや偲びがそこに存在するといえる。

清水(2009)は、京都の空間意匠として、分けて繋ぐ、見立てる、巡る、奥へ、くずす・ずらす、組む、間をとる、透ける、光と闇、水を生かす、生けどる、墨絵の世界、といった動詞を中心としたコンセプトに分けた。とりわけ、「ずらし」によって新たなイメージが掻き立てられることを指摘し、建物単体ではなく、木々の緑と合わさった周辺環境の中でその建物を見ると、単体では作りえない空間づくりの巧みさ美を感じるとしている。建物はシンメトリーではないが、別の要素でバランスを取りながら大きな緊張感を表出しているとする¹⁴⁾。

「差し引き」と「逆回し」(リバース)

「差し引き」とは、龍安寺の石庭など禅宗の庭園の作法に端的にみられるように、重要なもの(石庭の場合は水)を差し引くことによって、逆にそれを想起させる手法である。すなわち、浮かび上がらせる一つの技法として、極端に沈ませるわけであり、水を徹底的に排除することによって、逆に水を浮かび上がらせる効果もたらされる。この「差し引き」は欧米で理解を得ることは難しい面もあるものの、この理解を促すことによってブレークスルーが起こり、日本文化のさらなる理解が進むことは間違いない。

また、「リバースモード」といういい方も重要であろう。テープレコーダーの逆回転を思い浮かべれば理解できる。「逆説」の連続性を続けることによって、強烈な順説を生来させるということである。原価企画は欧米では、「リバース・カリキュレーション」(逆計算)といわれているが、市場で顧客から評価された価格が製品開発段階での目標価格の計算するための出発点であることを想起すべきである(岡野 2006a,b)。

(3) シンクレティズム:「習合」の合意と「補完」

シンクレティズムとは、異なる文化の相互接触により多様な要素が混淆・重層化した現象を指し、日本の神仏習合など、元来異質な神格や教義が混在・融合して一つの宗教体系をなしている場合や、同一社会に複数の宗教体系が併存し人々が状況に応じて関与する場合などがある。

シンクレティズムは折衷主義ともされてきたが、混合という意味の「折衷」ではない。二つのものが外見上は合体していると見えたとしても、両者は区別されながら、保持・保存されること、区別されながらも併存しているのである。そのシンボルが「唐破風」の屋根であり、神社や寺院に共通して見られながらも、それをくぐって中に入れば、まったく異なった世界が広がってい

る。文字通り「唐」を「破る」ものであり、神仏とも共通している意味はいかなるものであろうか。

山折(1983)は、近代社会で主流になってきた「われ」という意識的自我は究極的な人間の根拠といえるかという問いを發する。その上で、西田幾多郎による「自己とか自我、主体性を否定し、そうしたものを成立させている根元的な場所¹⁵⁾の優位性を主張する「絶対無」の視点を援用する。そして、自我を支える母胎としての共同体や無意識の領域、ヒトの生命を大きく押しつむ自然環境というものから示される「場所」の復権を示す。さらに、この「無の場所」という考え方がわが国の伝統的な神々の在り方、すなわち、自己の存在のあかしを主張せず、森や山のような自然のふところ深く、幽暗の「場所」にひたすら鎮まりかえるという固有の伝承を残してくれていると主張する。

これに対して、藤原(2008)は、日本文化の基本作法として「かさね」をあげ、神仏習合が神道と仏教とが同じ空間で棲み分けてきたこと、すなわち、一方が他方を排斥したり圧殺したりすることなく、重なりながらそれぞれ分をわきまえ領分を守り、親しく交わるのが有利とみれば「溶け合いなじみ合っ」てきたと述べる。そのうえで、「くずし」や「やつし」、「もじり」や「うがち」、「あそび」や「見立て」などの発想や作法を取り上げ、あくまで神仏習合の「習合」は混淆ではなく、交接し混血の神を生むことはなかったと主張する。

明治維新以降、政府による神仏分離や国家神道の成立などの史実はあるものの、庶民レベルにおける神と仏との関わり方、すなわち、日常生活に根差した習合と分離の在りようを見れば、藤原説の正しさを頷くことができる。

とりわけ神仏の補完関係を主張するのは末木(2006)である。すなわち、日々の生活のなかで、仏教だけでは解決のつかない問題があり、実質

的に神道がその役割を果たしてきたことを受け止めながら、神仏関係を考える必要性を説く。

また、これまで否定的な意味合いで使われることの多かったシンクレティズムを、ここでは積極的な意味合いで取り上げることを目指している (Stewart and Shaw 1994)。井上(2011)も指摘するように、シンクレティズム (やハイブリディティ) という言葉によって「文化」や「宗教」が隠喩的に語られると、人々の日常の営みが見えなくなる可能性が高くなる。

鎌田 (2009) は、モノとは物質性としての「物」から人間性としての「者」を経て、霊性としての霊 (もの) にまで至る多次元的なグラデーションを有するものであり、モノを知り、モノを使い、モノを食い、モノを語る人間の営みの総体を探求する学問を「モノ学」と称している¹⁶⁾。

近年、移民問題を中心として共生や共存についての議論が叫ばれている。ここでは、コトがモノに埋め込まれ、動きを触発するものとして「想い」を捉えること、つまり、異質のものを共存させた、日本における重層的な文化的特質を表すものとして文化編集を捉えることが緊要であろう。

(4) 文化編集をベースとした都市創造性

「制度」と人々の活動との「双方向性」の歴史 (連続性と非連続性) を記述するためには、単に経済活動における「事実」の記録・報告のための中立的な装置として「制度」を捉えるのではなく、今日われわれが生活している世界や社会的現実の類型、企業や個人に開かれた選択肢を見出す方法、多様な活動やプロセスを管理し組織化する方法、他人や自分自身を統治する方法などに影響を及ぼす一連の「実践」¹⁷⁾ として理解すべきである (岡野 2008, 2009a, b)¹⁸⁾。

「実践の歴史」を叙述するためには、社会史や文化史の様々なアプローチからの知見を受容しなければならないこと、とりわけ、「文化」は個

人や集団が創り出し、また享受するものであり、創り手、文化財、およびそれを享受するものの三者の相互関係に配慮しつつ文化の発展を追跡するのであるが、それが生み出された社会のありかたと切り離して論ずることはできない (阿部・西垣 2002)。ここにおいて、「創り出す」アクターと「享受する」アクターとのコミュニケーションが緊要点となる。文化編集はこの局面に作用するのであり、「翻訳」によって従来含められることのなかったアクターが含められ、アクター間の役割が変わるのであり、「翻訳」の中身が文化編集であるといえる。

さらに、経営手法は計算「実践」の制度化された「構築物」として理解され、経済的現実を映し出す「鏡」(技法) としてではなく、現実を構築する「テクノロジー」であると認識しながら、各自が持っている知識、場の認識、および社会が「当然のこととしている」認識によって制度が「社会的に構成される」とみなされるが、どのように構成されるかは状況依存的であるといえる。こうしたプロセスの歴史的記述についても、上述した特質を相互に関連させることによって、主体的なテクノロジーを構成するプロセスの記述が必要となるのであって、このプロセスの記述そのものが「新たな歴史」となる (岡野 2002, 2003)¹⁹⁾。

ここで、ワイク (1979) によるイナクトメント (保持された過去の経験)、さらには加護野 (1988) による「組織の慣性」の議論が深く関係するといえる。すなわち、環境の変化に対応して変化すべき組織行動が変化することなく、旧来の行動パターンが継続されてしまう現象であるが、ワイクにいわせれば「適応が適応可能性を排除する」ということであろう。「適応が適応可能性を排除する理由としては、最近有効であったやり方をヒトが記憶しているからである。記憶はイノベーションを殺ぐ」 (Weick 1979)。

これに対して、加護野 (1988) は、ワイクと同様、

組織の認識（認知）レベルに着目し、「見る、見分ける、感じる、分かる、信じる、考える、解く、選ぶ、学ぶなど」（p.60）の動詞が「概念を知識の利用と獲得にかかわる心的な活動である」としている。その上で、「日常の理論」を通じて情報の意味を読み取る主観的認識が存在することを強調する。

新制度主義における同型化プロセス、さらにはデカップリングの状況が起こらないようにさせることが重要であろう。同型化で一見すると同じような形態で体裁が保たれていることで安心するようなことが頻繁に起こる。このことによって問題の発見が遅れ、明示的になったときは手遅れということが起こる。こうした逆機能の長期的な潜伏を止めることが重要であって、実践コミュニティはこれを未然に防ぐものになりうるのである²⁰⁾。

(5) 創造性を高めるための動詞

「包摂する」：社会的持続性と包摂力

ここでは、創造都市・文化創造・社会的包摂を連結する概念として、ポレス(M.Polese)とストレン(R.Stren)による「社会的持続性」を取り上げたい。ポレスとストレンによる Social Sustainability of Cities(2000)では、ジェイコブズ(J.Jacobs)やフロリダとは異なり、都市化による「ダイナミクス」を記述している²¹⁾。都市はパブリックセクターの後退や労働市場の再構築によって社会的持続性への脅威を経験するが、移民の増加によってもたらされる多様性と通じ、新たな「機会」が得られると捉えるのである。

また、ポレスとストレンは、しばしば見逃されることの多かった、都市の多様な部分を「相互に結合した一つの全体」として紡ぎ、公的サービスと雇用へのアクセスのしやすさを増加させる、ローカルな「場のマネジメント」政策の役割を重視する。より具体的には、ハウジング、食物の配給、保健、近隣計画に関する新たな試みを行いな

がら、社会・経済的なネットワークを有する地域社会を出現させることを目論むのである。

「バランス」をはかる

都市の創造性の源泉を追求する場合、バランスをはかること(balancing)が求められる。ブラッドフォード(Bradford,2004)は、こうしたバランスの一つの有り様を示し、カナダやイギリス、さらにはオーストラリアの都市をケースとして、それらのバランスの取り方について検討している。創造都市であるためのバランスとして、次の9点をあげる。

- ・「地域コミュニティに根差したモノやコト」と「グローバルなコスモポリタンの影響」
- ・「遺産」と「新奇性」
- ・「国際的な関心を引くような大規模なフラッグシップ的プロジェクト」と「創造的な基盤を奮い立たせる小さなプロジェクト」
- ・「公式的な高度な文化」と「非公式のストーリー・シーン」
- ・「非営利のアーティスト」と「創造的な産業クラスター」
- ・「ローカルな知識」と「プロフェッショナルな専門技術」
- ・「規則に準拠した説明責任（アカウンタビリティ）」と「草の根の実験」
- ・「全体的な思考」と「戦略的な行動」
- ・「近隣の再生」と「社会包摂」

「地域コミュニティのルーツ」と「グローバルなコスモポリタンの影響」はこれまでの論稿(岡野 2009c)で取り上げたものであり、「遺産」と「新奇性」は UNESCO の世界遺産と創造都市ネットワークとの関係性を検討していることを想起させる。また、社会的持続性に密接に関連する項目として、「フラッグシップ的プロジェクト」と「小さなプロジェクト」とのバランス、「ロー

カルな知識」と「専門知識」とのバランスは重要である。

問題は、こうした「バランスをはかる」をどのような手段を用いて達成し、どのような状況になれば達成したとみなされるかにある。政策的にいえば、単純にプロジェクト別の予算配分のバランスによって達成できるものではない。

一方が他方の文化基盤として優先されるべきものも存在する。また、上であげた各項目内のバランスだけでなく、各項目間のバランスも重視すべきである。たとえば、業績評価尺度（バランススコアカード）を組み込んだ人事評価制度と教育システムとの融合された人事教育制度があげられよう。このバランスを達成するための一つの重要な思考がシンクレティズムである（岡野 2012a,b）。これは異なる文化の相互接触により多様な要素が混淆・重層化した現象を指し、日本の神仏習合など、元来異質な神格や教義が混在・融合して一つの宗教体系をなしている場合や、同一社会に複数の宗教体系が併存し、人々が状況に応じて関与する場合などがある。

「パッチングする」：俊敏性とダイナミックケイパビリティ

ダイナミックケイパビリティは、経営学の資源ベースドビュー（resource based view）という競争戦略論の流れから生まれたものである²²。とりわけ、主に 80 年代以降の日本企業の台頭を背景として、その戦略行動の理論化を行うプロセスで定式化された。

資源ベースアプローチでは、企業が保有する資源に価値（valuable）があり、稀少で（rare）、真似ができず（inimitable）、代替できない（non-substitutable）場合、それらの資源が当該企業の持続的競争優位の源泉となるとされる（Barney, 2002）。

しかしながら、一度獲得した資源は長期間維持されるのを前提としており、変化の激しい動

的環境は考慮に入っておらず、資源特有の固着性が逆に変革の足かせにもなるというパラドックスも内包されていた。

これに対して、ダイナミックケイパビリティの議論では、持続的競争優位というものも存在せず、資源の束を絶え間なく組み替えながら、新たな競争優位の獲得を頻繁に繰り返さなければならないとし、特定の資源そのものではなく、その時々で相対的に出現する「資源」を俊敏に組み替える能力がダイナミックケイパビリティであると定義される（例えば、Eisenhardt and Martin, 2000）。

また、ティース等（Teece et al., 1997）は、急激な環境変化に対応するため、企業内部や外部のコンピテンシーを統合・構築・再構成する能力であるとする。すなわち、新たな資源構成を実現する企業内のプロセスが重要であると考えられるようになってきた。

こうした思考の変化は、資源の束を組み替える能力だけでなく、戦略的提携などによって他社の価値ある資源や知識を自社に取り込む能力、異質な文化を持つ提携パートナーとの相互作用によって、新たな知識を生み出すケイパビリティ（knowledge creating capability）、すなわち組織学習がその前提として位置づけられるのである（野中 1990）。

さらに、アイゼンハートとブラウン（Eisenhardt and Brown, 1999）では、ビジネスチャンスの変化や移動に合わせて、絶えず事業をマッピングし直す、戦略的プロセスである「パッチング」（patching）²³の重要性を主張する。パッチングは変化の少ない市場よりも環境変化がめまぐるしい市場で効果的であるとし、パッチングの条件として、各事業ユニットがモジュール構造（共通単位を持つ部品を組み合わせたもの）で、完成度の高い業績評価指標があり、一貫した給与体系が組み込まれていることをあげている。

4 創造性の構成要素：阿倍野の歴史と創造性

それでは、創造性はどのようにして捉えればいいのか。ド・セルトーは、モノが幾千もの過去の実践を生かさせ、実践を通して使用者たちは社会文化的な技術によって組織されている空間を「我がもの」にするとし、数々のテクノロジーの構造の内部に宿って繁殖し、日常性の「細部」にかかわる多数の「戦術」を駆使してその構造の働きを壊してしまうような、微生物にも似た操作を行っている「モノ」に焦点を当てるべきであるという(ド・セルトー 1987, p.17-18)。

さらに、さまざまな集団や個人が、これからも「監視」の網のなかに囚われ続けながらも、他方でそこそこに散らばっており、戦術的で、ブリコラージュに長けた「創造性」が隠れた型(隠密形態)をとっているか、この在り様を掘り起こすことが必要であるとする。こうした策略と手続きを行う主体はあくまで「消費者」であり、彼らが反規律の網の目を形成していくと主張する。この点は、M.フーコーの「考古学」的理解とはまったく逆の発想であることに留意しなければならない。

都市創造性を考察するに当たり、大阪の歴史を紐解くことにしたい。アフリカで誕生した現生人類が、6万年前から世界各地に拡散し²⁴⁾、北方ルート、朝鮮半島ルート、南方ルートなどを辿って²⁵⁾、5万年前には日本へと到達した²⁶⁾。旧石器時代のことである。南北にのびた日本列島では、大陸からの流入ルートを源流とし、人類・文化・習慣が融合して、日本の基礎が形成された(帝国書院 2010)。

現代まで連続と続いてきたヒトの行動や営みを顧みるとき²⁷⁾、我々の祖先の大いなる努力に気づかされる。シルクロードや海の道を通じて、様々な文化が流入した。積極的に持ち帰ったもの、それを支配者や権力者、文化人、様々な人がそれらを吟味・評価し、取捨選択を行ってきた。

人類にとって、道は交通の手段のみならず、定住し、その地に根を張りつつ、別の方向に向かい、人類の進出する方向を辿っていくなど、様々な活動を行う際になくはならないものであった。宗教的な要因をはじめとする「文化的な要因」が非常に大きな意味を持っていた(Oppenheimer 2007)。

大阪は、山根徳太郎教授の難波宮・発掘によって、古都として位置づけられることになった。シルクロードの終着点であり、かつまた遣唐使の出発点として大阪・住吉津があるが、その正面にあるのが海の神を祭る住吉大社である(住吉大社 2008)。住吉の神はわだつみ=海の神で、住吉の地は瀬戸内のみならず朝鮮半島・中国大陸に至る門戸であり海上交通の要衝であり、古代以来、国家の保護を受け多くの人々の厚い信仰をうけてきた。

さらに、淀川から都・飛鳥や奈良、そして京都へ接続されるとともに、京都から、四天王寺・住吉大社と一心寺、そして熊野神社を結び付ける道として熊野街道が形成されていく。都市は文化や知識の集約点であり、文化の「増幅機」(拡声器)、さらにはその逆の「減幅機」(縮声機)の役割も果たす。道や街道は「文化の道」として、またヒトや物資の通る動脈として大きな役割を有するのである。

ここで道とオープンスペース²⁹⁾の含意は「ただ開いている」・「空いている」ということにはとどまらない。保存し、育み、発酵させ、熟成させることであり、道は通り道として、終着点として、出発点として、その空間のグローバルな広がりには京都の祇園祭などを見ても明白である。道は「記憶装置」としての役割だけでなく、他の地域とを繋ぐ重要な文化の増幅機として機能するのである。さらに、街のそれぞれにヒトとモノのなかに「想い」が埋め込まれていることを前提として、「想い」や「記憶」、見えるモノ、そして現在目の前で行われている活動から、過去の活動を

類推することを通じて、その埋め込まれたものを解きほぐしていく作業が求められるのである³⁰⁾。

ここにおいて重要な役割を果たすものがオープンスペースとしてのギャラリーである。現代アートや自動車など現代において創作されたモノの中にさえ伝統的技術が埋め込まれており、時間的な広がりの中で、ギャラリーの多重的含意に気づかされる。

道は、人間の文化的な生活になくってはならないものであり、人々の「想い」が重層的に埋め込まれたものである。都市の創造性に関わる、様々なアクターの相互関係を探りながら、オープンスペースとしてのギャラリーや寺院の在りようを見ることによって様々な発見をすることができる(岡野 2012a)。こうした、都市の記憶、現代人による新たなイメージの創造、ズラシなど動詞による文化編集に焦点を当てることによって、いかに活性化するかについてのヒントが得られるであろう。スペース・余白として、また大事だからあえて入れ込まないことも重要な文化編集である。ヒトとモノ、コトとの距離感をはかるためにも、空間やオープンスペース、そして記憶を呼び起こす「仕掛け」の重要性が大きくなっている³¹⁾。

目に見えない様々なモノやコトがスペースによって可能になる。しかし、結局はそうしたモノやコトを感じられるヒトが育つことが求められるのである。

(1) ヒト・モノと創造性

村野藤吾の建築とてりむくり

村野藤吾(1891-1984年)は1918年に早稲田大学理工学部建築学科を卒業後、大阪の渡邊節建築事務所で設計を学び、1929年に独立して阿倍野区阿倍野筋に事務所を設立し³²⁾、天王寺駅から事務所への途中に居を構えた。

代表作には「てりむくり」を36体配した旧大

写真2. 渡邊節(左)と村野藤吾



渡邊節追悼誌編集委員会(1969)

写真3. 36体の「てりむくり」を配した旧大阪新歌舞伎(難波)



筆者撮影

写真3. 数百体の「てりむくり」を配した現在の新歌舞伎座(上本町六丁目)



筆者撮影

阪新歌舞伎座(1958年)や「都ホテル佳水園」(1959年)などがあり、独自の世界を生み出してきたと評価されている。近鉄グループなど、同じクライアントから継続的に設計を依頼された。

村野は、『資本論』をはじめ、経済学や会計学へ大きな関心を持ち、旧制の大阪商科大学およ

写真5. 村野の蔵書の『資本論入門』（河上肇）と『減価償却研究』（木村和三郎）



(出所) 大村ほか編 (2008)

び大阪市立大学教授であった木村和三郎による『減価償却論研究』（1947）も愛読書としていた。これは設計事務所を運営する村野が、戦後、建物の減価償却の理論的基礎を追及していたことは明らかであり、マルクスの労働価値説を減価償却に援用した木村教授の理論に共鳴したことは想像に難くない³³⁾。労働価値説に基づいた減価償却に重きを置きつつ、価値回収計算に終わっている現実の会計実践を批判する。

阿倍野の創造性とかかわりでは、日本基督教団南大阪協会は、村野の処女作の塔屋(教会塔)と最晩年の新礼拝堂(改修)とが同時に見られる場所として重要である。先日のヒアリングでも、当時の牧師との強固な信頼関係を想起させるエピソードに事欠かないことが看取された。

創造性のアクターとしての天王寺蕪

「野沢菜のルーツは「天王寺蕪」であり、野沢温泉村の人々はそのことを知っていたという。昔からの伝統野菜は、栽培・イベントなどの地道な取り組みの過程で、人々の心をつなぎ、地域の歴史や文化を再発見して味わう機会を与えるとともに、現代の社会や生活の在り方を振り返らせてくれている

宝暦6年(1756)、野沢温泉村・健命寺の8代目住職・晃天園瑞和尚が京都遊学の折、天王寺蕪の種子を持ち帰り、裏の畑で栽培し「蕪菜」と呼ん

でいたが、昭和に入り、温泉客やスキー客でにぎわうようになると、「野沢菜」として土産に持ち帰られるようになり、「野沢菜」の名は全国に知れ渡ることとなった。まさしく自分もそれを実行していたことを思い出す。

なによりも重要なことは、野沢では子供時代から天王寺蕪のことが話題にのぼり、村のパンフレットや野沢菜のしおり、野沢菜の種子、野沢菜漬けの袋などに天王寺蕪と野沢菜の歴史が紹介されていることであろう。そこには感謝の気持ちが見え隠れしている。健命寺には「野沢菜発祥の地」碑と、種子を持ち帰った晃天園瑞和尚の顕徳碑が建立されていることも重要である。

さらに、「和尚が天王寺蕪の種を持ち帰らなかったら今の野沢菜がないわけだから、昔、和尚が種子を持ち帰った道を歩こう」とし「野沢菜伝来街道ウォーキング」が始まった。すなわち、天王寺蕪発祥の地である四天王寺を出発し野沢温泉村までをリレーで歩くイベントが、平成21年には530kmを25日かけて、平成25年には約600kmを30日かけて行われたのである。まさしく「野菜を通じた地域交流の深まり」が見て取れる。

こうした野沢の動きに呼応して、大阪でも平成7年、信州出身の料理研究者から、「天王寺蕪は野沢菜のルーツ」という情報を得て、天王寺蕪が復活することになる。

創造性のアクターとしてのメタセコイア：三木教授・太陽の塔・信楽の木節粘土（メタセコイアを含む）

ヒノキ科の樹木メタセコイアは、大阪市立大学の三木茂教授が化石で発見され、1941年に英文論文で世界中に発送されたが、戦時中のこともあり、多くは届くことはなかった。しかし、1945年に四川省で生きた原木が発見され、戦前から交流のあった中国植物学会の泰斗の胡先驌教授が「三木が化石で発見したメタセコイア（水杉）である」とし、同じく戦前から交流のあったカリフォルニア大学バークレー校のチェイニー教授の仲立ちで、植物学者であった昭和天皇や日本政府に苗木100本が送られた（斎藤1995）。

これと進駐軍（GHQ）自らが植えた苗を元にして、日本の各地で植えられていく。近年、滋賀県高島市などでは「メタセコイアの並木道」として町おこしにも利用されている。同様の取り組みは中国・南京市や上海市などにおいても見られ、中国の高等教育機関ではアカデミズムのシンボルとして位置づけられている（岡野ほか2015）。

ここでは、1970年に大阪で開かれた「人類の進歩と調和」をスローガンとした日本万国博覧会（EXPO'70・大阪万博）とメタセコイアとの関係、そして陶器で有名な滋賀県信楽町との文化的関係について触れてみたい。

岡本太郎が制作した芸術作品であり建造物である太陽の塔は、大阪万博のテーマ館のシンボルとして建造され、万博終了後も引き続き万博記念公園に残されたが、メタセコイアがその周りを取り囲んでいることは様々な意味において象徴的なものである。

まずは、太陽の塔の裏面には信楽で取れたメタセコイアなどの化石や養分が含まれた「土」によって創られた信楽焼であるという点である。岡本太郎を信楽に招き入れたものは、太郎の求めていた「脈動する心臓の血の」色であり、「生

命を凝縮した太陽の色」であった。これを完成させるための（木節粘土と石英が混ざり合った）信楽の土とそれに合致した（ガラスを使った低火度釉とは異なる深みと光沢のある）釉薬、そして、こうしたイノベーションを達成しようと試みたヒトの存在である。こうしたヒトやモノ、そしてコトをつなぎ合わせる創造性の要素として次の3点が挙げられる。①定型性と自由度とのバランス、②即興性、③リズム、がこれである。

岡本太郎と信楽との関係性に即していえば、まず、縄文という型を歴史のなかから「出土」させながら個人や社会の自由度を獲得すること、すなわち、伝統の中に拘泥する（法隆寺を維持することを一義的に考える）のではなく「自分が法隆寺（のような存在）になる」（岡本2005,51頁）という方法の提示である。第二に、太郎の望む「赤」を信楽では出せるとする一見無謀なやりとりを通して得た太郎の信頼とそれを独自の釉薬を編み出すことによって「赤」を実現に導いた近江陶業の技術陣の即興性と長年の高い技術力をあげることができる。

三木教授と学会発表した夕陽丘高校の引田茂教諭

三木教授（大阪市大）が当時共同で研究していた夕陽丘高校の引田教諭に次のように言われた（夕陽丘高等学校創立80周年記念誌1986）。

君、メタセコイアが生きていたんだよ！中国の奥地に。論文が生きたメタセコイアに審判されることになる。すぐにでも生きた植物と突き合わせたい。

その時の感動が今でも蘇えるようである。まだその続きがある。引田教諭はチェイニー教授から送られた葉の形態と組織を分担して遺体と現生種を比較し、1940年4月に名古屋大学で開かれた日本植物学会で発表された。

発表を終わってふと気がつくその後方上段の席で数人の若い学生が盛んに拍手を送ってくれていた。よく見ると夕陽丘高校生物研究部の男子部員で、全く驚いた。

1950年といえど戦争が終わって5年しか経っておらず、高校生が大阪から名古屋大学まで駆けつけるのは容易いことではなかったであろう。同校の現在の校長先生に聞くと、「当時の学生は自主性を持って行動していた」という。教師冥利に尽きる思いであったに違いない。その研究が実って、三木教授と引田教諭との研究が翌年の学術雑誌 *Science* 誌 (Jan 5, 1951) に掲載されることになった。学会報告の応援のため駆け付けた高校生はこの偉業を知ってどれほど励まされたことであるか想像に難くない。

その他、中国との関わりでは、1956年、同高校に中国教育視察団が来訪した際にメタセコイアを記念植樹したことや、1982年の日本植物学会100周年大会で中国からの来賓挨拶で「三木教授が名づけたメタセコイアが絶滅寸前、特に日本で保護育成されており、日中友好の木である」と述べたことなどがあげられる。こうしたエピソードの奥底になにかがあるか、まだ解明すべき事柄は多い。

桃が池・万代池とメタセコイア

東住吉との境界に位置する桃が池にもメタセコイアがある。桃が池は「百が池」あるいは「股が池」ともいわれ、聖徳太子の使いが大蛇退治をした池として、近年では田辺古墳群との関連も指摘されている。また、都市計画に基づく区画整理による公園として日本初といわれている。神仏習合の様相を色濃く残す「股が池大明神」は町内会が管理しているが、こうした様々な歴史の中でメタセコイアが存在することとの間には様々な見えない糸がありそうである。

この桃が池公園の一角に昭和中学があり、そ

写真6. 桃が池のメタセコイア



筆者撮影

写真7. 昭和中学のグラウンドとメタセコイア



筆者撮影

写真3. 大阪市住吉区の万代池から移植されたことを示す銘板 (枚方関西外国語大学旧学研都市キャンパス内)



筆者撮影

のグラウンドには4本の大きなメタセコイアがあった。その内の3本が2015年暮れに伐採されることになるが、以下の写真はその直前に筆者が撮影したものである。その時期が日本に再上陸してから数年以内のことでありことから、今後、さらに掘り下げていく必要がある³⁴⁾。

また、阿倍野区に隣接する住吉区の万代池にもメタセコイアがあるが、ここにはかつて東住吉区で開校した関西外国語大学のキャンパスが

あり、現在は枚方に2つのキャンパスに移されている。その中の一つの学研都市（穂谷）キャンパスには万代池から移植されたメタセコイアがあり、木のラベルにそのことが記載されているとともに、新たな「万代池」が前理事長によって作られた。まもなく、枚方市御殿場に移転する予定であるが、計画案には正面入り口に10本以上のメタセコイアが配置されている。

(2) 知と創造性：知の中継地・編集地・発信地

医師であった中野操(1897-1986)は、大阪における医史学の権威として国際的に知られている存在である。京都府に生まれ、京都府立医専(現京都府立医大)を卒業後、陸軍軍医から日赤大阪支部病院に勤務をへて、戦後、周防町で開業し、後に阿倍野晴明通に移った。自宅も阿倍野区松崎町から晴明通に移され、医療活動につとめる傍ら、昭和13年、医史学普及のため杏林(きょうりん)温古会を設立し、機関誌『医譚』の発行や『増補医事年表』の編纂、『大阪蘭学史話』の執筆など、大阪の医学史研究に邁進された。蔵書の中には天文21年(1552)の『黄素妙論』など室町時代に遡る医学書、1733年オランダ刊の『セウユリルスフラーカコンスト』を蘭方医新宮涼庭(1787~1854)が写した日本最古のオランダ文法書、江戸時代大阪の医事年表のほか、『医譚』編纂に関する資料など、日本医史学上比類ない歴史資料である。「中野操文庫」(13461点)として2014年に大阪市の指定有形文化財に指定された。

上述のように、出身は京都でありながら、大阪で開業し、大阪の医学の歴史研究に生涯を捧げられたが、その動機を探ることによって、阿倍野の創造性に接近できるであろう。『大坂名医伝』のあとがきにおいて「大阪に住んで半世紀以上、生を受けた京都以上に愛着を感じる大阪」あるいは「第二の故郷、大阪」と記すなど、大阪への愛着を述べられている。中野に直接インタビュー

写真9. 阿倍野小学校・校庭にあるメタセコイア



筆者撮影

写真10. 阿倍野小学校の「グリーンマップ」



筆者撮影

一された榊原によれば、「権力に反発し、自己の力のみをたよりにすべてを切り開いて来た大阪町人の不屈の意気に先生が心を惹かれたわけであって、先生の御性格がその学問の針路を決定したものといえる」とされている³⁵⁾。

また、阿倍野小学校の校庭にある4本のメタセコイアはある時期、伐採の危機にあったが、いまでは「アベノッキー」というマスコットも作られ、PTA会報などでも活躍している。

さらに、校庭にある花や木を紹介した「グリーンマップ」があり、授業にも活用されていることは注目できる。

晴明丘小学校の創立100周年記念事業として2000年に作られた「自然学習観察園」と「地域園芸クラブ」の活動も重要であろう。「観察園」の土地そのものは1953年に当該校の土地となり、1954年にはプールとして、1956年には修養室と

して「晴樟館」が寄贈され、庭園と茶室が設置された。

これを一つの契機として、児童に対し自然とのふれあいを促進させる目的で1980年には「フィールドアスレチック」や「木かげの広場」が、そして2000年には「アスレチック」のあとに人工ビオトープと学習園からなる、稀有な存在としての「自然学習観察園」が造成されることとなった。

さらに、「天王寺蕪」をはじめとする「なにわ伝統野菜」の植え付けや田植えや稲刈りの実習のための田んぼの設置、池の新設や川の改修工事など、様々な自然との関りを体験できる施設になり、まさしく創造的空間となっている。

(3) 場・みちと創造性：朝陽館と「てりむくり」

西区の川口居留地から大阪の中華料理は生まれたことはよく知られている(横田2007, p.91)。さらに、それ以前では長崎から大阪、そして山東省から大阪へと遡ることができた。

また、レポートシリーズ阿倍野版では、戦後において第1号店(総本店)を阿倍野区阪南町に構え、その後多くの系列店を展開した中華料理店の「明洋軒」を取り上げた。戦前の勝山通の屋台を経て、終戦後、昭和27年9月、阿倍野区阪南町2丁目で、福井県大野市の親戚を中心とした職人を雇いながら、6人程度の職人とともに「広東料理明洋軒」を創業したのであった。

阿倍野筋とあびこ筋を結ぶ都市計画道路として昭和50年頃には「松虫通」が開通するが、それまでは道幅5メートル程度しかない一方通行の通りであった。周辺には阿倍野小学校や阿倍野高校や阪南高校、住吉高校などがあり、熊野街道がある閑静な住宅街が広がっていた。

晴明通の近くにある「朝陽館」は、道修町の薬商小西久兵衛(3世)が明治後半に大阪の財界人が広大な別荘を構えた一つであるが、大隈重信侯など政府や軍、皇族関係の要人が滞在した場

所として有名である。八尾・服部川に最盛期は

写真11. 八尾の庭樹園に残されていた朝陽館の写真
(中央には「てりむくり」がある)



岡野ほか(2017)54頁

160件以上ある造園業が作られたが、その一つで今年創業140年を迎える「庭樹園」を創業した當内廣吉はこの朝陽館の庭の管理を任されることになる。この写真は久兵衛翁より廣吉に戴いたものとされ、陸軍大将福島安正男爵と宮内大臣土方久元伯爵が訪れた際のものであるという。これは、庭師で近代日本庭園の先駆者として有名な小川治兵衛(植治)が天王寺で住友家の「慶沢園」を造庭したのも同じ時期であるが、廣吉は植治とも交流があった。當内廣吉が所有していた正嘉元年(750)につくられた十三塔を植治に売却しており、その十三塔は京都南禅寺界隈にある別荘「野村碧雲荘」(八尾・久宝寺出身で文化人でもあった野村証券の二代目野村徳七の創建)に設置されている。また、庭樹園の當内家の旧宅離れ座敷も「朝陽館」の建て替えに伴って下賜されたものといわれている(岡野ほか2017, 55頁)。自然と造園文化や産業を媒介とした創造的ネットワークの事例として興味深い。

(4) 集り・交流と創造性

美章園の「大阪スポーツマンホテル」と長居球戯場(サッカー場)

JR 美章園駅前の鉄筋4階建の和洋折衷建築「美章園旅館」から「大阪スポーツマンホテル」

への変更により、鉄道管理局など企業の営業マンやサッカー関係者や受験生などにとって必須の施設となった。昭和61年4月に廃業した後、平成17年秋に「ティールーム&アートギャラリー・エムズ」をオープンし、4～5回の企画展のほかグループ展や個展でアート作品の発表の場として利用されている。

この場所が、1993年のJリーグと直接繋がっていたとはだれも想像できないに違いない。父親である濱崎都雄とサッカーの記憶、さらにメキシコ五輪のゴールキーパーであった兄である濱崎昌弘もその記憶の中にある。今では日本でも有数のテニス場を持つ駒公園にはかつてサッカーグラウンドがあり、「大阪スポーツマンクラブ」が存在していた。美章園の「大阪スポーツマンホテル」はその記憶と重合する。

また、ドイツのデットマール・クラマー(Dettmar Crammer)が1964年の東京オリンピック日本代表チームの指導のために来日、ベスト8の成績を残して4年後のメキシコオリンピックでは銅メダルを獲得する。同年、長居競技場(現在のヤンマースタジアム)が完成しサッカーの大会も多く開催されて日本におけるサッカーの認知度も上がった。

美章園(北田辺)の川村塾

阿倍野区にあった自宅から阪和線の高架をくぐったところにご夫妻で声楽家の「川村塾」に通った。「Mine, yours, his, hers its に whose!」「well」は「井戸・上手に・良く」、”effect”は「結果・効果・趣旨」と叫ばれていたことが思い出される。

川村先生は生野工業高校では数学の先生。応援歌を作曲され、声楽コンテストも優勝をされているという。声楽家に英語を教えてもらっていたのだ! この定番のリズミカルな繰返しに加えて、テンポよくコンパクトに色々な内容を盛り込まれ、「川村塾ノート」が出来上がった。と

りわけ品詞の定義やその機能を重視し、暗唱するよう指導された。「日本の英語教育は文法をしっかりやる」ということがよく言われてきたが、川村塾では徹底していた。先生の奥様もやはり声楽家で、先生に劣らない腕前であったと思え、土曜日には音楽理論の授業をしていただき、#とbの数と長調・短調の名称を「トニイホロへ・ヘロホイニト」と唱和する方式は川村先生の英語と同じ方式であった。美章園の創造性を垣間見た思いがした。

5 阿倍野の創造性に関する3つの軸：バランス・即興性・リズム

(1) 阿倍野の道(道路・河川・水路)：定型性と自由度のバランス

これは、型を歴史のなかから創り出しながら、個人および社会の自由度を獲得することを示すものである。自然からヒトから、過去の文化的なエッセンスを消化し、過去の様々な遺産や思考法を借りながら、編集しながらこれを定型化することによって、一方では自由度を獲得する方法となるのである。

まず、「阿倍野の軸」といえるようないくつかの軸がある。一つは南北に通じる歴史的な熊野街道であろう。八軒屋から南に下る熊野街道は上で指摘したように、道は交通の手段のみならず、定住し、その地に根を張りつつ、別の方向に向かい、人類の進出する方向を辿っていくなど、様々な活動を行う際になくてはならないものであったし、文化的にも非常に大きな意味を持っていた。

たとえば、上町台地の西端は「夕陽丘」と呼ばれ、大阪湾に沈んでいく太陽を眺める場所として、信仰の対象になってきた。極楽浄土を観想する「日想観」を行う場所として浄土宗の開祖・法然の草庵が一心寺となったという。

また、1980年前後における松虫通の開通によって、これまで課題とされてきた東西の移動軸

がスムーズになったといえ、渋滞が緩和されたともいえる。他方では、これまでの豊かな住環境が大きく変化し、多くの人々が立ち退きで他の地域に移住を余儀なくされた。とりわけ、地元根差した生活用品や食料品などの多くの店が消えてしまった。また、道路の拡幅工事によってかつての活気あるコミュニティが消えてしまうことにもなった。同じことが、南海平野線の廃止と地下鉄谷町線の延伸工事、高速道路の開通によって、一方では便利さが増した半面、人の行き来が阻害され、街並みや商店街の状況が変化し、伝統工芸に関わる職人などが廃業に追い込まれることを目の当たりにしてきた。

(2) 阿倍野の即興性

第二のファクターとしてあげられるのが即興性である。即興 (improvisation) とは「構図 (作曲) と実行 (演奏) の行為が不可分であり、構図 (作曲) / 実行 (演奏) のそれぞれが過去のそれらとは異なること」(Bastien and Hostager, 1992)、「自発的な方法で行為を導く直感」(Crossan and Sorrenti, 1996)などと説明され、アドリブと同義とされる³⁶⁾。

「即興性」の分野はジャズ音楽を引き合いに出されることが多いが、ジャズの象徴への接近は避けることができず、ジャズは即興がさらに大きく洗練されたものに発展した静かな現象の一つとなった事実がある。探究へと進歩させた団体の有効性は、学者が徹底的に調べた比喩的なアリーナと交響楽団の演奏会ほど違いが見られる(Kanter, 1989; Sayles, 1964)。

「即興による創造性」とは、価値の創造、効果的な新製品、もてなし方、ひらめき、行動、複雑な社会的組織の中での個人の働きによるプロセスに関係するとする(Woodman et al. 1993)。また、Miner et al.(1996)によれば、行動とは、変化を起こすこと、改正すること、創造すること、変更したりつけ加えたりすることよりも、より

純粹に即興で「新たな発見」をすることであるという。

美章園に存在していた和洋折衷建築「美章園旅館」から「大阪スポーツマンホテル」、そして「ティールーム&アートギャラリー」の流れとサッカーの聖地・大阪を作り上げた長居球場との間には、Woodman が指摘する新たな価値の創造やもてなし方、ひらめき、など、すべてに関連しているといえよう。ニーズの新たな掘り起しは、自らもサッカーの日本レベルでの運営に携わりつつ、選手の一父兄としてのニーズ(遠征時の宿泊先が不足している)を掘んでいたからこそ、次の「大阪スポーツマンホテル」への第一歩が可能となったのであろう。また、美章園における電気店からシンセンサイザーなど電子楽器の世界的メーカー「ローランド」を創業した梯幾多郎の行動の中にも「即興性」を見出すことができる。

(3) 阿倍野のリズム³⁷⁾

「リズム」(律動)とは時間軸における二つの点を置くことにより、その二点間の時間に長さを感じるようになるが、その「長さ」をいくつか順次並べたものをいう。すなわち、「時間的現象要素の規則的反復である」といえる。これに対して、「拍子」は、弦を一樣に叩くこと、あるいは弾くことである。

「リズム」と「拍子」の対立は、運動の持続性がリズムとして体験されるためにはまず拍子がそれに加わらねばならないということと矛盾しない(クラーゲス 1971)。それゆえ、運動が少なからず[リズムの]決定的要因としてとどまる。

しかし、他方で、「リズム」と「拍子」が本質的に異なる発生源を持つにもかかわらず、人間のなかで互いに融合しうる³⁸⁾。「繁栄と衰退、受容と放棄、邂逅と離別など、人間生活にとって避けることのできないこれら転変とともに、あらゆるリズム的脈動を、ことさら人間の生命の非

常に感動的な反映たらしめているものはまさにこれのみである。

「リズム」と「拍子」、および創造性との関係性についていえば、時間的および空間的に「ずらす」(文化編集) ことによってリズムが生まれ、創造性が生みだされる可能性がある。村野藤吾による36体の「てりむくり」を並列させた新歌舞伎座(難波)は、このことを如実に示す例であるといえよう。また、新歌舞伎座(上六)はそのアイコンを継承するとともに、「てりむくり」の数をさらに増やすことによって、こうした「リズム」と「拍子」をさらに強調する効果を倍増させる意図が読み取れる。異なる地域における文化の重なり、時間の重なり、ずらしの文化編集によって、新たなリズムが生まれ、創造的な繋がりを目指すものであるが、世代の感性の違いにより「リズム」と「拍子」との関係性に対する好き嫌いが生じることとなるのであり、こうした変化・変容に対して支持が得られるかどうかの問題となるのである。すでに述べたように、八尾の庭樹園に残されていた一枚の写真(写真8)は、阿倍野・晴明通の「朝陽館」でのものであり、道修町の薬商小西久兵衛(3世)による文化財であった。八尾の植木業「庭樹園」と阿倍野の朝陽館、そして京都の庭師・小川治兵衛(植治)、さらには「野村碧雲荘」を創りあげた八尾・久宝寺の野村徳七ともに繋がる。こうした自然と造園文化や産業を媒介とした創造的ネットワークの基底には「リズム」の創造性が存在するのである。

6 都市の「生態」とメタセコイア

次に、メタセコイアを取り上げ、岡野(2013)での分析のフレームワークである「ヒト・モノと創造性」、「知と創造性」、「場・みちと創造性」、「集り・交流と創造性」を要約し、自然と文化創造性・復元力の考察を行ってみよう。

アクター(アクタントともいう)の各カテゴリーは「主役」になるだけでなく、(その意図とは

別に)他のアクタントの間の「緩衝材」として機能する場合もあり、意図に反し逆機能的なスペースを創り出すことになる。時には過去の事実や記憶が進展を妨げることになることもある。

それらの植物の由来や各国における文化的な意味の共通点や差異を中心に、その樹木を守ってきた市民や農民、世界に伝えた日本・中国・韓国・アメリカなどの研究者間のネットワークについて、時空を超えた創造的空間としての都市を仏教や儒教の文化において捉え、都市においての生活からもたらされる文化の多様性や拡張・広がりを研究してきた。

銀杏とともに「生きた化石」とされる「メタセコイア」は、中国では「水杉」と称され、上海や南京、杭州などにおいてアカデミックなシンボルとして大学の本部棟の中心に植えられてきた。これに対し、日本の場合は恐竜時代に絶滅したこともあって、中国の生きたメタセコイアを上述のようにアメリカを経由し、大阪市立大学附属植物園を生産基地として西日本に広げられた。成長のスピードが速いため「すくすくと健やかに育ってほしい」という願いから小・中学校の校庭に植えられたほか、古墳の発掘の終了後にその周辺を囲むように植えられ「太古の森」の象徴として位置づけられてきた。

約1億年前の中生代白亜紀の温暖期には、グリーンランドまでメタセコイア林が分布し、その後の寒冷化で、北アメリカ、アジア、ヨーロッパ東部にまで南下した。そして、日本からは約100万年前に消滅したが、中国では生き残っていた。超大陸パンゲア時代には、生きたメタセコイアが発見された南中国と日本やカリフォルニアは一直線で結ばれていたことも重要な意味を持っている。つまり、日本やアメリカでは絶滅したメタセコイアが、なぜ中国で生き延びたのかという問題を解くためには、古生物学、植物学、地質学、地形学、民俗学を統合した学際的研究が必要である

表1. メタセコイアとアクターとの関連性

アクター (アクタント)	メタセコイアと都市文化の諸側面
ヒト・モノ (両者の結合)	進駐軍 (大阪市立大学・ゲーテ大学・家族住宅など) 駐屯地 (桂・宇治など) 野球場 (神宮第二 松島) テニスコート (東京ローンテニスクラブなど) 芸術・映画 (韓国・春川市「冬のソナタ」) 福田美亮 (金光教 SF) 水 ジュンサイ ギター (倍音)
知	リンネ ダーウィン 植物学者のネットワーク チェイニー 胡 鄭 三木茂 天然資源局長 (スケンク) 中国・土家族の「創世記」
場・道・広場	人類の来た道 (出アフリカ) 世界航路 公園 (鞠、浜寺、平和公園、大阪城公園 沢之町公園など) 住居 植物園 (バリ、ライデンなど) 博物館 飛行場 (各務原など) 平和公園 ビース通り 遺跡 学校 (大 阪市立大学・夕陽丘高校・市岡商業・住吉高校・昭和中学・阿倍野小学校・オックスフォード大学 ⁹⁾) 冬の ソナタ 平和のシンボル 太古の森 高速道路 (空港線) 小学校から大学 (本部棟)
集り・交流 (コト)	メタセコイア保存会 イベント 結婚 (土家族・ご成婚) 祈り 日想観 (浄土信仰) 聖イグナチオ教会 (上智大学) カトリック教会 (主にクラレチアン宣教会) UNESCO EU 金光教会 (サンフランシスコ)
記憶	古墳 (五色塚古墳・禁野車塚古墳など) 葬式 (土家族) 祠 (神木) 家族の記憶

仏教や儒教の伝播とともに重要な植物として、仏像や寺院に使われる樹木の種類の比較や発展プロセス、さらには各地域の民族や宗教と仏教・儒教との融合や独特な文化の醸成の理解と寛容性との関わり、それらによるビジネスのあり方への影響、なども重要な論点である。仏像というモノが、異民族の文化や技法の変遷に影響を受け、それぞれの民族の生活において独自に変化し伝播していったとみることができるのであり、商業 (ビジネス) と文化の密接な関わりとシルクロードなどモノの道と宗教の道との関係性なども取り上げる必要がある。また、歴史の断面の一つ一つが現代のわれわれの生活に直接的な関係性を持っていることも重要な問題意識である。

「メタセコイア」は、都市研究プラザがこれまで提案してきた「持続的で包摂的な創造都市」の在り様を体現している。すなわち、発見した人々とそれを学術的に検証し、世界的なネットワークでその存在を知らせるとともに、中国の内戦下にアメリカの市民団体である「レッドウッド保護団」の資金的援助を受けて採取した種を持ち帰り、終戦後、生育環境の類似した日本に苗木を大量に送るといったチェイニー教授 (カリフォルニア大学) の行動力と、生きたメタセコイアを

神木として信仰の対象にしてきた四川省の農家族 (少数民族) と地域のネットワークなど、持続的で包摂的な社会の在り様を観察し、現状の社会と比較し、多様な知見を得ることができる (Gittlen 1999)。

こうした事例は、決定後に国際的な紛争や対立が起きている最近の文化遺産や記憶遺産の状況に一石を投じるものであろうし、インドを発祥としながら東アジアを核とする仏教や儒教と樹木・植物との関わりについてのエピソードなども永く人々に伝えるべき事柄である。上述したように、昨年に文化遺産に認定されたシンガポール植物園は、戦時中、郡場寛 (元京大教授、メタセコイアの三木茂の指導教官) 等が E.J.H. コーナー (後年、ケンブリッジ大学教授・ロンドン・リンネ協会幹部) とともに観察・研究し、園を破壊から守ったものであるが (コーナー1982)、時を経るにしたがってそれを知る人も少なくなってきた。また、科学博物館や自然史博物館では植物学や地質学など自然科学の学問そのものに焦点が当てられ、国を跨いだ文化的意味合いなどについては取り上げられないことが多い。

7 おわりに

これまで大阪の文化を形作ってきたヒトやモノ、コト、知、そして道の「記憶」を掘り起こし、蘇らせる仕掛けを構想し、実現させることが重要である。阿倍野の歴史的推移の基底は、河内湾・河内潟、河内湖時代の重なりと変化、日想観（浄土信仰）、曹刊街道と一般道、古道と新道などの関係性、そのプロセスにおける神木の伐採など、様々な文化編集の在り様、多様な見えないアクターの関係性の変化などが埋め込まれていることがわかる。都市の創造性をデザインするためには、都市に関わる人々を動機づけるための信頼関係をいかにして構築するかが重要であり、都市において本来持つべき包容力・バランス・俊敏性を確保する総合的システムの構築が求められる。

阿倍野を中心としたメタセコイアやてりむくりの例で示したように、ヒト・モノ、知、場・道、集り・交流、そして記憶のネットワークが創造性の源泉である。ただし、ワイク(1979)が指摘したように、記憶はイノベーションを殺ぐ場合もあり、学習棄却(unlearning)が必要となる場合もある。一見すると同じような形態で体裁が保たれていることで安心するようなことが起こりうるのであって、このことによって問題の発見が遅れ、明示的になったときは手遅れということを避けなければならない。

ここで取り上げた文化編集という見方は、多様性や多義性を含んだ重層性という概念と密接に関連している。歴史における様々な断層面の時間と空間を超えた関連性を読み解くことが必要であろう。断層面の重なり具合に着目し、それらの断層面がどのような複合的な意味内容を持っているか、さらには、その意味内容がいかなるプロセスで単一の意味内容に収斂させられてしまうか、という問題に切り込むためのものである。冒頭で述べた個人の中での「引き裂かれ」は、「グローバル」という折衷的なあり方ではなく、コスモポリタニズムに基づいた公共空間を拡張

することが重要であり、このためにも文化編集の視点が有用である。

【注】

- 1) ここでいう「市民知」とは「市民による実践知」として捉え、「市民が持っている実践・理論の相互浸透から長い年月をかけて形成された知」と定義づける。
- 2) 1943年に大阪市が15区から22区へ移行した際、住吉区が3区（住吉区・東住吉区・阿倍野区）に分区されて阿倍野区が生まれた。区域としては旧天王寺村の大半と、田辺町・住吉村・長居村の一部から成り、1943年以前の住吉区役所は現在の阿倍野区内にあったことから、当初「住吉区」を継承することが検討されるなど、「天王寺」と「阿倍野」、「住吉」という名称の間は歴史的に複雑である。
- 3) 岡野(2017)では、「文化編集」を用いてウプサラ市による「リンネが構築した体系的生物学の生成による世界遺産」やUNESCO創造都市、EU文化首都のケースを検討した。
- 4) 鎌田(2010)は、それぞれの民族には、固有の言語体系ないし言語文化にとって、一語彙として使用頻度が高く、文法的にも概念的（意味論的）にも核（心）になる「根源語」が存在するとし、「モノ」（物・者）と「コト」（事）をあげている。日本語の「モノ」は物質的・人間的・霊的の三つの次元があり、その三層一体的な非二元論敵思考の持つ創造性や可能性を探求すべきことを主張する。
- 5) この思考の基礎にはアクター・ネットワーク理論（ANT）がある。ANTは、1980年代後半からフランスのM. カロンとB. ラトゥール、イギリスのJ. ローが中心となって発展させた理論であった（Amin & Cohendet

- 2004)。ANTの方法論的な特徴として、研究の初期段階から一切の前提を置かない点があげられる。ANTは西洋における「自然」と「社会」、「主体」と「客体」という近代的二分法を採用せず、「人間」と「非人間」のイデオロギー的区別を超越しようとしていることにある。いかなるモノが「行為者」であるか、「行為者」でないかを先行条件とせず、フィールドワークで判断する。こうした視点からすれば、内的意図を持ち合理的な行為を行う「者」と、ただその行為の背景となる受動的な「モノ」との区別は単なるイデオロギーにすぎないとし、アクター（行為者）は近代的な人間主体を示すアクターではなく、独立して本質的な特質を持たず、単にエージェンシー（行為能力）であるアクタント(actant)とみなされることによって、ヒトとモノの結合からエージェンシー（行為能力）が生まれ、アクター・ネットワークに分散されていると考える。
- 6) 創造都市の概念は Laundry(2000)、Florida(2002)などを嚆矢とするが、創造性そのものについてはそれまでも重要なテーマであった。たとえば de Bono(1970)、西堀(1990)などがある。さらに、都市の創造性についての最近の論考としては Cohendet, et al.(2010)、Okano & Samson(2010)、Heraud(2011)、Stolarick et al. (2010)などがある。
- 7) 丸山が「原型」という用語を諦め、地質学的比喩としての「古層」、音楽的比喩としての「執拗低音」を使ったかについては丸山(2004)を参照(144頁)。「かりにこの比喩を用いて日本思想史を見ると、主旋律は圧倒的に大陸から来た、また明治以後はヨーロッパから来た外来思想です。けれどもそれがそのままひびかないで、低音部に執拗に繰り返される一定の音型によってモディファイされ、それとまざり合って響く。そしてその低音音型はオスティナートといわれるように執拗に繰り返し登場する。ゲネラル・バスのようにただ持続して低声部の和音をひいているのではない。ある場合には国学の場合のように表面に隆起してメロディとしてはっきり聞き取れ、ある場合には異質の主旋律に押されて輪郭が定かではないほど『底』にもぐってしまふ」。
- 8) 日本の経営システム、ひいては日本企業の行動様式の四つの特徴を「動詞化」によって検討すれば、日本の経営システムやその底流にある日本的行動様式の端緒的な在り様、すなわちアーキタイプが見て取れるであろう。
- 9) ここで重要な概念は「社会的持続性」である。これは社会の「質」を反映し、自然と社会との関係を示すものとして捉えられ、社会における諸関係および経済活動やボランティアなど、様々な実践を通じて仲介されるものであり、人々の欲求を満ちし、自然とその再生産的な能力が長年にわたり保持され、社会的正義や人々の尊厳や参画が満たされる方法に応じて形成される(Littig & Grief3ler, 2005)。
- 10) これについてはフーコーの歴史認識との親近性がある。詳しくは岡野(1995)を参照。
- 11) 藤原(2008)は、重ねは日本文化の「基本作法」と主張する。。
- 12) 彼は四天王寺周辺に「夕陽丘」の語源ともなった「夕陽庵」(せきようあん)を建てた。
- 13) 心の内奥を、空間的な奥行や厚みとして表現しようとするものを示す。
- 14) また、自動車に竹による日本の伝統を埋め込み、職人の手作業を埋め込んだ事例としてLexusのCT200hがある。日本を象徴する素材であり、工芸品の材料とされることが多い「竹」がパネルに採用された。3年で成長し伐採でき、環境に優しい素材である竹はハイブリッドカーにふさわしい素材である。縦に

裂き、重ねることで水平な直線模様を浮かび上がらせるとともに、塗装を施さずに「いぶす」ことで自然の風合いを表現しようとした。さらに、漆器の表面のホコリを除去し、滑らかで艶を出すための伝統技法である「水研ぎ」という手法を車体の塗装面に用いた。漆を塗り、水研ぎを施し、その上に漆を塗る工程を繰り返すことで、漆器が日常品としての器から伝統工芸品に昇華される。また、塗装面を6層にして、噴射口の強い遠心力によって塗料を微粒子化し、きめ細かく塗ることで、色むらを最小限に抑えた。ここでチーフデザイナーが重視したのは、「正統派で本質的価値をベースにした、新しい価値観」を顧客に感じてもらうことであるが、これは日本の文化編集技法である「合わせ」や「重ね」を用いながらも、「ずらし」が埋め込まれているといえる。また、周囲の自然や素材を尊重しながら、そこに調和する美を獲得するための試みともいえ、背景の山や木を使いながら、庭園そのものには石や砂を用い、自然美を引き立たせる文化操作手法を用いた、「枯山水方式」と共通したものといえよう。

- 15) 場所とは、われわれヒトの意識や判断が成立する根元的な場所のことを示す。
- 16) これに関連して、岡野(1995)では、ヨハネ福音書の冒頭にある「はじめにロゴスありき」のロゴスを「言葉と行いの未分離の状態」であることを指摘した。はじめにコトありきであり、ロゴスは言葉と行いの結びついたモノ・コトの集合体であると理解したい。
- 17) 実践についてド・セルトーは次のように述べる。すなわち、「こうした『モノのやり方』は、幾千もの実践をつくりなしており、そうした実践をとおして使用者たちは社会文化的な技術によって組織されている空間をふたたびわがものにするのである。それらが提起する問題は、フーコーがあつかった問題と似てもいるし、またその逆である。似ているというのは、数々のテクノクラシーの構造の内部に宿って繁殖し、日常性の『細部』にかかわる多数の『戦術』を駆使してその構造の働きかたをそらしてしまうような、なかば微生物にも似たもろもろの操作を明るみに出すことが問題だからである。また、逆だというのは、秩序の暴力がいかにして規律化のテクノロジーに変化していくかをあきらかにするのはもはや問題ではなく、さまざまな集団や個人が、これからも『監視』の網の目のなかにとらわれ続けながら、そこで発揮する創造性、そこそこに散らばり、戦術的で、ブリコラージュにたけたその創造性がいったいかなる隠密形態をとっているのか、それを掘り起こすことが問題だからだ。消費者たちが発揮するこうした策略と手続きは、ついには反規律の網の目を形成していく。それこそ本書の主題である」(ド・セルトー 1987, p.17-18)
- 18) 実践史と理論史、連続と変化のそれぞれの相互関係については岡野(1995・2002)を参照。
- 19) 制度的特質と変化：適応・変態・進化・革新の異同関係については、Meyer, Brooks and Goes (1990)に詳しい。彼らは、連続と非連続、そして組織と組織フィールド(組織・人が置かれている関係のネットワーク)の4つの関係性によって、適応(組織内の連続的变化)・変態(組織内の枠組みを超越するような変化)・進化(確立済の組織内の連続的变化)・革新(創発・変容・フィールドの衰退)に分けた。
- 20) Sternberg (2003)は、創造性の類型として、「写し取る」、「再定義する」、「前進させる」、「さらに前進させる」、「方向を変える」、「再構築する(逆・分岐)」、「再始動する」、「統合する」という8個の動詞を提示する。
- 21) J.ジェイコブズは、「創造都市」の主役である

- 職人企業というマイクロ企業のネットワーク型の集積が示す「柔軟性、効率のよさ、適応性」のすばらしさに驚嘆し、その特徴を輸入代替による自前の発展とイノベーションとインプロビゼーションに基づく経済的自己修正能力あるいは、修正自在型経済と把握している。
- 22) 経営戦略論において、ポジショニングから、資源ベース、ダイナミックケイパビリティへの重点変化については岡野(2003)およびダイナミック戦略、とりわけパッチングについては Eisenhardt and Brown (1999)および Brown and Eisenhardt(1998)を参照。
- 23) パッチングとは、(応急的に) 手当とする、鎮める、調停する、などの意味がある。「鎮める」や「調停する」については、原始宗教や神道との関連性が浮かびあがる。これまでの組織改変との差異については Eisenhardt and Brown (1999)を参照。
- 24) 現在、この「アフリカ単一起源説」が最も有力である (Stringer & McKie 1996)。
- 25) 次の四つのルートも非常に興味深い。「北方系農耕文化の伝播ルート」(あわ、きび、大麦、かぶ、からしな、ねぎ、ごぼう、そば、豚の飼育や堅穴式住居など)、「チベットからの作物の伝播ルート」(えん麦や大麦)、「照葉樹林文化の伝播ルート」(稲・あわ・きび、大豆、ささげ、えごま、しそ、温帯系のさといも、養蚕、もち米の栽培、こんにやくづくり、麴を利用した酒の醸造)、「海の道による作物の伝播ルート」(南方系の稲、熱帯系のさといも、やまいも)の四つである。
- 26) 日本人の起源についての最新の成果はニュートンプレス(2009)に詳しい。なお、フーコーの系譜学、「起源」の拡散、雲散霧消についての考察は岡野(1995)を参照。
- 27) 遣隋使・遣唐使、朝鮮通信使などはその端的な例である。それらの文化的側面については仲尾(2007)を参照。
- 28) 難波宮(前期・後期)の「おもかげ」を見ることによって「古都・大阪」という表現を了解することができるであろう(追手門学院上町学プロジェクト 2011)。難波宮を発掘したのは山根徳太郎(大阪商科大学教授)である(山根 1962)。
- 29) オープンスペースについてはホワイト(1971)を参照。
- 30) 記憶・場所・身体と祭りとの関係性については中野(2007)に詳しい。
- 31) 「時代に置き去りにされていたような狭い路地にも人が訪れ移り住んで、物を作るかすかな音、子供たちの声が聞かれるようになったのも大きな変化であろう。街は心地よい風吹き抜け今までと違った柔らかな表情をみせてくれている。同時に近代的オートロック付のマンションも林立していった。ふるさと新しさの共存が望まれていった」(三島 2012)。
- 32) これは 2017 年現在も存在する、心齋橋に置いた事務所分室はいまは存在しない。
- 33) 全くの偶然ではあるが、筆者が大阪市立大学商学部の専門ゼミで輪読したのも木村教授の『減価償却論』(新版)である。減価償却(実践)があるべき労働価値説(理論)から逸脱(木村教授は「転倒」と表現している)していることを歴史研究によって明らかにし、さらに当時の会計研究の世界的権威であった Paton 教授および Littleton 教授の『会社会計基準序説』を真っ向から批判されたことは、一介の学生に過ぎなかった私から見ても圧巻であった(木村和二郎『会計学研究』を参照。)
- 34) 昭和中学の南側には「ピース通り」があるが、周辺には GHQ が接収した住居などが多く、沢之町公園(現在は住吉区役所)とともにメタセコイアが植えられている。
- 35) これは 1976 年の夏、中野の自宅でのインタビューからそのように結論づけている。榊原

聰彦「私の祝詞」『中野操傘寿記念誌』105頁。
また、同じことは山本四郎も同記念号において述べている。

- 36) 即興演奏は「演奏の過程において作品が創作されること、あるいは演奏過程において作品に最終的な形が与えられること」と定義される。
- 37) クレストン(1968)は、リズムの要素として、拍子・速度・アクセントおよび型をあげ、アクセントがリズムの生命であるとする。「それ(アクセント)なくして、拍子は単調な鼓動拍の集合の連続にすぎず、速度は全く動きの感覚をなくし、型は雲をつかむようなぼんやりしたものになってしまう」(35頁)。岡(1987)は、リズムが音楽・芸術・文化をはじめ、日常生活の隅々にまで浸透しており、東と西の文化が各民族の「リズム的風土」の上にはっきりと根付いていると主張する。
- 38) クラークス(1971)は、昼と夜、明と暗、夏と冬、生長と衰弱、生誕と死亡、貯蔵と分配、逗留と放浪、拘束と放逐のリズム的交替のなかに、また、天と地、太陽と太陰、火と水、男と女、上と下、前と後、右と左のリズム的交互性においても、生成と消滅へと対極化する万象の姿を明らかに見出そうとする。このような諸現象のリズム学は現象世界の領域内にとどまり、直接現象するリズムの本質的特徴を拡大することによって、原則的に測定可能な中間ではなく、上がり下がりや下がり上がりの質的対立によってリズム的な交替現象になっているという。
- 39) オックスフォードについては、大学附属植物園、それに隣接するマートンカレッジ(天皇陛下留学)、TS エリオット記念館などに植えられている。

【参考文献】

- 阿部猛・西垣晴次(2002)『日本文化史ハンドブック』東京堂出版。
- 伊丹敬之(1991)『グローカル・マネジメント：地球時代の日本企業』日本放送協会。
- 上田正昭(1988)『住吉と宗像の神：海神の軌跡』筑摩書房。
- 近江俊秀(2013)「大和と河内の峠道」(鈴木靖民・吉村武彦・加藤友康編『古代山国の交通と社会』八木書店、所収)。
- 大阪府立夕陽丘高等学校(1986)『大阪府立夕陽丘高等学校創立八十周年記念誌』
- 大手門学院上町学プロジェクト(2011)『上町学再発見・古都おおさか』学校法人・大手門学院。
- 大村理恵子ほか(2008)『村野藤吾：建築とインテリア ひとつをつくる空間の美学』アーキメディア。
- 岡利次郎(1987)『リズム考：東と西の文化の源流』草楽社。
- 岡野浩(1995,2002)『日本の管理会計の展開：「原価企画」への歴史的視座』(初版)(第2版)中央経済社。
- 岡野浩(2003)『グローバル戦略会計：製品開発コストマネジメントの国際比較』有斐閣。
- 岡野浩(2004)「日本の管理会計の変容：社会的・制度的アプローチからみた原価企画」『会計』第166巻第5号、706-716頁。
- 岡野浩(2006a)「日本管理会計史研究序説：社会史・文化史としての方法」『経営研究』第56巻第4号、99-113頁。
- 岡野浩(2006b)「管理会計の受容と創造：計算モデルとしての原価企画とABCとの差異」『経営研究』第57巻第1号、1-13頁。
- 岡野浩(2008)「日本の管理会計史の断層面：文化の重層性とアーキタイプス」『会計』第173巻

- 第5号、2008年5月、773-789頁。
- 岡野浩 (2009a) 「日本の管理会計の連続性と非連続性」『会計』第175巻第3号、309-320頁。
- 岡野浩 (2009b) 「管理会計戦略の実践的射程」『企業会計』第61巻第6号、794-802頁。
- 岡野浩 (2009c) 「グローバル創造都市の文化ブランド戦略」(佐々木雅幸・水内俊雄編『創造都市と社会包摂：文化多様性・市民知・まちづくり』水曜社、65-84頁)
- 岡野浩 (2012a) 「都市創造性と文化編集」岡野浩・三島啓子編『都市創造性プラットフォームとしてのアートギャラリー：大阪空堀をめぐる文化ネットワークの形成』大阪市立大学都市研究プラザ。
- 岡野浩 (2012b) 「原価企画の文化史的含意：動詞化・述語的包摂による文化編集の視点から」『会計』第182巻第4号、475-488頁。
- 岡野浩 (2014a) 『大阪・交野の自然と創造性：大阪市立大学・私市植物園と庵原遜のコスモロジー』大阪市立大学都市研究プラザレポートシリーズNo.29。
- 岡野浩 (2014b) 『信楽の都市創造性と社会デザイン：自然と都市と市民知に関する文化編集分析』大阪市立大学都市研究プラザレポートシリーズNo.30。
- 岡野浩 (2017) 「復元力・文化編集・世界遺産：創造的な述語で編集・包摂する」(阿部昌樹ほか『包摂都市のレジリエンス：理念モデルと実践モデルの構築』水曜社、31-43頁)
- 岡野浩 (2018) 『都市生態と文化創造：阿倍野から広域的ネットワークを構築する』(レポートシリーズ) 大阪市立大学都市研究プラザNo.43。
- 岡野浩・三島啓子 (2012) 『都市文化プラットフォームとしてのアートギャラリー』大阪市立大学都市研究プラザレポートシリーズNo.25。
- 岡野浩・西辻豊 (2013) 『大阪・八尾の都市創造性：市民知による文化実践分析と文化編集』大阪市立大学都市研究プラザレポートシリーズNo.28。
- 岡野浩・塚腰実 (2015) 『メタセコイアと文化創造』大阪公立大学共同出版会。
- 岡野浩・潘山海 (2016) 『利他主義・レジリエンス・創造性：日本・中国における植物社会デザイン』大阪市立大学都市研究プラザレポートシリーズNo.34。
- 岡野浩・西辻豊・太田博之 (2017) 『八尾の自然と文化：植物(ボタニカル)社会デザインと広域都市ネットワーク』大阪市立大学都市研究プラザレポートシリーズNo.41。
- 加護野忠男 (1988) 『組織認識論』千倉書房。
- 加藤周一・木下順二・丸山真男・武田清子 (2004) 『日本文化のかくれた形』(現代文庫) 岩波書店。
- 鎌田東二 (2009) 『モノ学の冒険』創元社。
- 鎌田東二 (2010) 『モノ学・感覚価値論』晃洋書房。
- クラークス, L. (1971) 『リズムの本質』(杉浦實訳) みすず書房 (原著出版年1923年)
- クレストン, P. (1968) 『リズムの原理』(中川弘一訳) 音楽之友社。
- コーナー, E.J.H. (1982) 『思い出の昭南博物館：占領下シンガポールと徳川侯』(中公新書) 中央公論新社。
- 榊原聰彦 (1977) 「私の祝詞」『中野操傘寿記念誌』(『医譚』第49号)
- 佐々木健一 (2010) 『日本的感性：触覚とずらしの構造』中央公論新社。
- 清水泰博 (2009) 『京都の空間意匠：12のキーワードで体感する』光文社。
- 高口恭行 (1996) 『都市のたくらみ・都市の愉しみ：文化装置を考える』日本放送協会。
- 立岩二郎 (2000) 『てりむくり：日本建築の曲線』(中公新書) 中央公論新社。
- 武田清子 (2004) 「まえがき：日本文化のかくれた形」加藤周一ほか(2004)所収。
- 茅原雅之 (1999) 「家隆における西行歌受容考：『心

- の果』と『しのぶの奥』『研究紀要』(日本大
学文理学部人文科学研究所) 58号
- 寺田透 (1978) 『道の思想』 創文社。
- ド・セルトー, M. (1987) 『日常実践のポイエテ
ィーク』 (山田登世子訳) 国文社。
- 中野紀和 (2007) 『小倉祇園太鼓の都市人類学: 記
憶・場所・身体』 古今書院。
- 中野操 (1983) 『大坂名医伝』 思文閣。
- 中野操 (1977) 『中野操傘寿記念誌』 (『医譚』第49
号)
- 西堀榮三郎 (1990) 『創造力: 自然と技術の視点か
ら』 講談社。
- 日本医史学会関西支部 (1985) 『中野操先生米寿記
念誌』 (『医譚』第54号)
- ニュートンプレス (2009) 『ニュートン: 日本人の
起源』 ニュートンプレス。
- ファビオ, G. (2011) 「行為者としての『モノ』: エ
ージェンシーの概念の拡張に関する一考察」
『同志社社会学研究』 No.15。
- フーコー, M. (1969) 『知の考古学』 (中村雄二郎訳)
河出書房新社。
- 藤原成一 (2008) 『かさねの作法: 日本文化を読み
かえる』 法蔵館。
- 松岡正剛 (2006) 『日本という方法: おもかげ・う
つろいの文化』 (NHK ブックス) 日本放送出
版協会。
- 丸山真男 (2004) 「原型・古層・執拗低音: 日本思
想史方法論についての私の歩み」 (加藤ほか
2004 所収)。
- 三島啓子 (2012) 「楓ギャラリーの設立と経過」 (岡
野・三島 2012 所収)。
- 山折哲雄 (1983) 『神と仏: 日本人の宗教観』 講談
社。
- 山根徳太郎 (1962) 『難波の宮』 学生社。
- 渡辺節追悼誌編集委員会 (1969) 『建築家 渡辺節』
大阪府建築士会。
- Amin, A. and P. Cohendet (2007) *Architectures
of Knowledge*, Oxford: Oxford University
Press.
- Barney, J.B. (2002) *Gaining & Sustaining
Competitive Advantages*, 2nd ed., NY:
Pearson. (岡田正大訳『企業戦略論: 競争優
位の構築と持続』ダイヤモンド社。)
- Bastien, D.T. and T. J. Hostager (1992) “Co-
operation as Communicative Accomplish-
ment: A Symbolic Interaction Analysis
of an Impovised Jazz Concert,” *Communi-
cation Studies*, 43, pp.92-104.
- Bourdieu, P. (1977) *Outline of a Theory of
Practice*, Cambridge: Cambridge Univer-
sity Press.
- Brown, S.L. & K.M. Eisenhardt (1998) *Co-
mpeting on the Edge: Strategy as Struc-
tured Chaos*, Boston: Harvard Busin-
ess School Press. (佐藤洋一訳『変化に勝
つ経営: コンピーティング・オン・ザ・エッ
ジ戦略とは』トッパン、1999年。)
- Cohendet, P., D. Grandadam & L. Simon (2010)
“The Anatomy of the Creative City,”
Industry and Innovation, Vol.17, Issue 1,
pp.92-111.
- Crossan, M. and M. Sorrenti (1996) *Making
Sense of Improvisation*, unpublished ma-
nuscript, University of West Ontario.
- de Bono, E. (1970) *Lateral Thinking: Creativity
Step by Step*, NY: Harper & Row.
- Eisenhardt, K.M. & S.L. Brown (1999)
“Patching: Restitching Business Portfolios
in Dynamic Markets,” *Harvard Business
Review*, May-June, pp.72-82. (DIAMOND
ハーバードビジネスレビュー編集部訳『「選
択と集中」の戦略』ダイヤモンド社、2003年。)
- Eisenhardt, K.M. & J.A. Martin (2000) “Dy-
namic Capabilities: What are they?” *Str-
ategic Management Journal*, Vol.21, No.
10-11, October, pp.1105-1121.

- Farias, F. & T. Bender (2010) *Urban Assemblages: How Actor-Network Theory Changes Urban Studies*, London: Routledge.
- Florida, R. (2002) *The Rise of the Creative Class*, NY: The Basic Books.
- Giddens, A. (1984) *The Construction of Society*, Berkeley: University of California Press.
- Gittlen, W. (1999) *Discovered Alive: The Story of the Chinese Redwood*, Pierside
- Harvey, D. (2009) *Cosmopolitanism and the Geographies of Freedom*. New York: Columbia University Press, 2009. 大屋定晴ほか訳『コスモポリタリズム』作品社、2013年。
- Heraud, J.-A.(2011) “Reinventing Creativity in Old Europe: A Development Scenario for Cities within the Upper Rhine Valley Cross-border Area, *City, Culture and Society*, Vol.2, Issue 2, June.
- Kanter, R.M. (1989) *When Giants Learn to Dance*, NY: Simon & Schuster.
- Landry, C. (2000) *The Creative City: A Toolkit for Urban Innovators*, NY: Earthscan. (後藤和子『創造的都市:都市再生のための工具箱』日本評論社、2003年。)
- Litting, B. & E. Grief3ler (2005) “Social Sustainability: A Catchword Between Political Pragmatism and Social Theory,” *International Journal of Sustainable Development*, Vol.8, No.1/2.
- Meyer, J.W. & B. Rowan (1997) “Institutionalized Organizations: Formal Structure as Myth and Ceremony,” *American Journal of Sociology*, 83-2, pp.340-363.
- Miner, A.J., C.Moorman, C. Bassoff (1996) *Organizational Improvisation in New Product Development*, unpublished manuscript, University of Wisconsin, Madison, WI.
- Nicolini, D., S. Gherardi & D. Yanow (2003) *Knowing in Organization: A Practice-Based Approach*, NY: M.E.Sharpe.
- Okano, H. (2008) “The Cultural Significance of Management Accounting in Asia: India, China and Japan,” *Congress Proceedings, Vol. 1, 12th World Congress of Accounting Historians*, July 20-24, 2008, Istanbul, Turkey, Avciol.
- Okano, H. & D.Samson (2010) “Cultural Urban Branding and Creative Cities: A Theoretical Framework for Promoting Creativity in the Public Spaces,” *Cities*, Vo.27, Supplement 1, pp.10-15.
- Okano, H. (2010a) “Building Business for Poverty through Cultural Creativity,” *The 8th Academic Forum on Empowering Urban Culture and Creativity; Art, Publicity, and Transformation*, Chulalongkorn University (Thailand), March 9-10, 2010.
- Okano, H. (2010b) “Building Businesses for Poverty Through Cultural Creativity: BOP (Bottom of the Pyramid) and Social Sustainability,” *Proceeding of CCS Workshop at University of Manchester*, 9 November, 2010.
- Okano, H. (2015a) “Cultural Editing for Linking City, Culture and Society,” *Publications 3*, p.5-9.
- Okano, H. (2015b) *A History of Management Accounting in Japan*, Bingley: Emerald Group Publishing.
- Okano, H. (2016a) “Accounting in Japanese Companies: Cost Designing for Product Development,” *Routledge Handbook of Japanese Business & Management*, ed. by

- P. Haghirian, Abingdon, Oxon: Routledge.
- Okano, H. (2016b) "Cultural Editing for Creativity: A Framework to Associate Person/Thing, Event, Road and Memories," *City, Culture and Society*, Vol.7, Issue 1, March, pp.55-61.
- Oppenheimer, S. (2003) *Out of Eden: The Peopling of the World*, London: Constable & Robinson. (仲村明子訳『人類の足跡 10 万年全史』草思社、2007 年。)
- Sternberg, R.J. (2003) "The Development of Creativity as a Decision-Making Process," in Sawyer (2003) *Creativity and Development*, Oxford: Oxford University Press..
- Stolarick, K., B.J. Hrats & R.Florida (2010) Occam's Curse, Dialectics and the Creative City, *City, Culture and Society*, Vol.1, Issue 4, Dec., pp.175-177.
- Stringer, C. & R. McKie (1996) *African Exodus: The Origins of Modern Humanity*, Henry Holt & Co. (河合信和訳『出アフリカ記：人類の起源』岩波書店、2001 年。)
- Teece, D.J., G. Pisano, & A. Shuen (1997) "Dynamic Capabilities & Strategic Management," *Strategic Management Journal*, Vol.18, No.7, December, pp.509-533.
- Weick, K.E. (1979) *The Social Psychology of Organizing* (2nd ed.), McGraw-Hill. (遠田雄志訳『組織化の社会心理学(第2版)』文眞堂。)
- Woodman, R.W., Sawyer, J.E. and R.W. Griffin (1993) "Toward a Theory of Organizational Creativity," *Academy of Management Review*, 18(2), pp.293-321.

Metasequoia and Terimukuri:

Urban Ecology and Cultural Editing around Abeno and Other Areas, Osaka

Hiroshi OKANO

Osaka City University Urban Research Plaza

[Key words] Urban ecology, actor network theory (ANT), culture editing, syncretism,
Metasequoia glyptostroboides, terimukuri roof

This paper, based on the case handled in the previous URP Report Series (Karahori, Yao, Shigaraki, Abeno, Shanghai, Malta, Uppsala, et al.), examines the way of cultural exchange inter-regions by the type of creative space building by citizen's knowledge. In particular, through citizen-level economic and cultural activities centered on Abeno, plants of "Metasequoia glyptostroboides" found in schools and parks, and "terimukuri (roof)", and various actors (actors/things) in culture, nature, ecosystem, and examined through examples of Abeno how these networking ways can be a place to create citizen intellect. Human/thing, knowledge, place/street, gathering/exchange, networking of memories are the source of creativity, but memories sometimes kill innovation and may require unlearning learning. The perspective of culture editing is closely related to the concept of multilayerality including diversity and ambiguity. It is necessary to understand the relevance beyond time and space of various fault planes in history. Focusing on the degree of overlapping of fault planes, we will examine what kind of semantic contents these fault planes have, and what process the meaning contents converge to a single semantic content in what process.